

## 昌平饜北寮殺人事件

### MURDER IN THE NORTHERN DORMITORY OF SHŌHEIZAKA ACADEMY

ロバート・キャンベル\*

Around noontime on the third day of the Eleventh Month, 1823, Kano Gunbei, a vassal to the lord of Aizu and student in residence at the Bakufu's Shōheizaka Academy in Edo, ascended alone to the second floor of his dormitory where he cut down in cold blood one fellow student and severely wounded two others before being overcome and then arrested by peers. His first victim, Nishimura Yūzō, was a young samurai from Isahaya, Hizen Province, and known in the Eastern Capital as a poet of some skill. At the time of his murder Nishimura was salaried as the literary tutor in the Academy's two dormitories for provincial students in Yushima. According to Bakufu records of the court trial held in the next year, Kano felt slighted by his colleagues, and blamed the salaried tutorial staff for not preventing his harassment: a loss of face had led him to the dreadful act.

---

\* Robert CAMPBELL カリフォルニア大学卒業。ハーバード大学大学院博士課程修了。九州大学講師。論文に「天保期前後の書画会」(『近世文芸』第47号)、「幕末十五年の雅文芸」(中央公論社『日本の近世』第18巻)などがある。

The man responsible for subduing Kano was one Kurotaki Tōta, a Tsugaru vassal, and in 1823 student chief of the dormitory itself. Kurotaki, along with two other students, knew in fact of Kano's frustrations before the crime, and for this reason all three were held partly responsible by magistrates at the court. Two others were punished; Kurotaki got off due to his bravery at the scene of the crime. Kano had died "of illness" shortly after being thrown into jail. One of Kurotaki's underclassman, a new face at the Academy just arrived from Saiki domain named Nakashima Masuta, was named literary tutor immediately after Nishimura's death. According to Nakashima's own writings and to letters from friends in Kyushu, his sudden promotion was due more to verve in helping to quell the murderer that fatal day than to any single literary merit.

Nakashima Masuta was, however, perhaps the most talented poet and prose stylist of his class at the Academy. According to some, he held promise to surpass even Rai San'yo, the most highly regarded kanshi poet of the Bunsei age. Masuta, who wrote under the penname Shigyoku or Beika, left Shōheizaka Academy in 1825, to return to service in his native province. He died in Saiki in 1834, at the age of thirty-four. At his appointment to the prestigious literary tutorship in 1823 he was a mere twenty-three, and it was precisely from this point that he gained nationwide recognition for a lyric style often sensual, sometimes macabre in the style of Li-he.

This paper outlines the events leading to Nakashima's promotion, and aims in a larger sense to delineate the literary milieu of the Bakufu's Academy in the 1820's.

今日は、幕末から明治へという時代に添って発表を用意するというご用意でしたが、少し主旨を曲げまして、幕末より一つ手前の、文政期（西暦で申しますと、1820年代ですが）、を舞台に展開されたある事件について発表をさせて頂きたいと思います。発表というよりも、中間報告です。結論を先に申しますと、要旨に書きましたように、幕府の大学の中で学生同志の殺人事件というのが起こります。しかし、この時期に、刃傷沙汰がなぜ起こらなければならなかったのか、また当事者たちの功罪が具体的にどのように展開し事件に至ったかなどについて、発表者には、十分に究明できない部分が少なからず残っております。一国の人倫道徳を規定し、体現すべき幕府の学問所教官からすれば、忌々しい不祥事であり、学問所の閉門を案じるほど憂慮したものでした。幕府聖堂の異変について、当時出版された文献に言及がないのは当然と言えるでしょう。そして現在にいたるまで、一件に関する報告すらないというのが事実であります。しかし、当時の、当事者による日記や書簡など、いわば非公式の資料をひもとけば、豊かな証言もあり、徐々に広がってゆく異変の波紋を読み解くことはできます。

幕末・明治を照準にすえた研究発表や著述は最近、再び目につくようになりました。ただ、かつてのように、明治維新を近世期の終焉ですとか、近代期の夜明けですとか、維新时期を単純な分岐点として捕らえる気運は、ほとんどなくなつたとも言えます。当然のことですが、明治時代はそもそも維新から始まり、その維新という動かしがたい時空が介在するかぎり、文学史においても時代区分の意義を問わなければなりませんけれど、幕末期には、そのような万人が共感するような決定的な瞬間があったとは言えません。幕末文学史が具体的にいつ、どのように作動し始めたかを問うことは、大変意義深いものではありますけれども、答えを出す前に幕末という時代そのものの核心を衝かなければならず、現在の発表者の力には荷が重すぎます。従いまして、今日のお話しが展開する時代背景を要約すれば、世代など、幕末と重なる部分を持ちながらも、いわゆる幕末的な様相をまだそれほど色濃く示さない、徳川泰平最後の10数年間、

江戸における文政期ということになりましょう。

幕末の文学と言えば、たとえば江戸の街を縦横無尽に走る勤皇家たちの活躍を思い浮かべる人が多いでしょう。彼らには、例えば各藩の江戸藩邸に奔走し、あるいは幕府が直営する昌平坂学問所（以下は通称の昌平黉と呼びます）、この昌平黉の書生寮の中に潜み、悲憤慷慨を詩文に注ぎ込む青年詩人として姿を留める場合が多い。

周知のように、悲憤慷慨のこの青年詩人たちは育ち、維新直後、日本の文教政策を担う官僚や学者になってゆくわけですが、彼らは同時に幕末文学史の最初の書き手でもありました。1850年前後、嘉永期の頃の昌平黉には、頼鴨崖や松本奎堂、重野成斎、南摩綱紀、岡鹿門といった俊秀がすでに揃い、その後に高杉晋作らも入って参りますけれど、彼ら全員に共通するのは、文芸に対する飽きない渴きであり、向学心であります。嘉永5年、仙台から入学した岡鹿門は20歳ですが、彼がのちに書いた回想録『在臆話記』は、在学中の思い出を描くところから始まります。それを見ますと、寮のなかでは、舎長と呼ばれる寮長や助手、あるいは経済の講釈を受け持つ先輩たちが多い中でも、奉禄が少なく位も低い詩文掛かりという教職が、彼らの眼に断然羨ましく映った事実が分かります。資料の一を御覧ください。

舎長、助勤ヨリ、詩文掛ヲ榮選ト為ス。其訳ハ、經史ノ学ハ人々勉メテ至ルベキモ、詩文ノミハ天才アル者ニ非ザレバ能ス可ラザレバナリ。故ニ四十員中最俊秀ヲ擢テ詩文掛ト為ス。此時三浦安〈西条藩。後、元老院幹事、東京府知事〉木原老谷〈土浦藩〉森文之助〈一関藩〉諸人、皆傑出人ナレドモ。南摩（綱紀）、重野（成斎）二人、特に詩文ヲ能スルヲ以テ、不次ニ詩文掛ト為ル。重野、天稟聡明、文才敏捷、安井、塩谷諸耆宿ノ逡巡スル所ト為ル。羽倉簡堂、佐久間象山ト成斎ヲ称シテ、所作アル毎ニ刪政ヲ属ス。常ニ称シテ後輩ノ領袖ト為ス。

昌平黉のこの時代を語る『旧事諮問録』という記録によりますと、書生寮に住む舎長は定員1人で5人扶持、助勤は2人で3人扶養、そして詩文掛かりは

常時2人がいて、2人扶持をそれぞれが宛われたと言います。年功序列にかかわらず、詩文掛かりは入学間もない弱年者であっても、才能次第誰でも就任することができます。「不次」に採用されるということは、そういうことを意味します。

やがて鴨崖や奎堂や晋作は瓦解を前に倒れ、『在臆話記』に挙げられる綱紀・成斎・そして岡鹿門自身も、一度は書生寮詩文掛かりの職を経験し、幕末の動乱を掻いぐったあとに、それぞれ新政府に仕え、出世した人々ばかりであります。

今日の発表では、彼らの先輩にあたる中島子玉という一人の人物の経歴を取り上げたいと思います。子玉は、大分県の南端にある佐伯市、つまり豊後二万石佐伯藩の藩士として生まれました。小さな外様大名の家臣の家に生まれ、子供時分から滋味ゆたかな育英教育を受け、大変才能を伸ばした人物ですけれども、不幸というべきでしょう、幕末の風雲急を見ずに、天保5年（1834年）、34歳で病死しています。南摩綱紀や重野成斎がちょうど生まれる頃、文政期の半ばには昌平黌の書生寮詩文掛かりを一年間半ほど勤めた経験もあります。しかも先に申しました刃傷沙汰の、いわば当事者の一人に数えられます。

しかし、後輩たちと違いまして、子玉には、出版された遺稿集やまとまった伝記がまるでなく、従来彼のことを語る材料は極端に少ないとされてきました。そこで先ず、20代までの事績を簡単に紹介しておきましょう。

藩士中島幹右衛門の長男として生まれ、16歳で藩主の命令を受けて豊後の日田にゆき、広瀬淡窓の門下で指導を受けます。咸宜園が本格的に拡大し広く宣伝され始めたばかりの時代にあたり、ちょうど淡窓の弟広瀬旭莊も、子玉より6歳年下ですが、塾中で勉学に励んでおり、詩文指導のことなどで、子玉からたいそう可愛いがられておりました。子玉は、一年間で咸宜園の学級制度の上限を越え、後に都講、つまり塾全体の教務を司る教職に踊り出ます。手紙や日記の中では、淡窓は子玉の経学にこそ触れませんが、詩文のことは常に絶賛しています。また文政元年、上方から九州に下った頼山陽も、子玉の作品を示さ

れると、資料の二「中島子玉伝」に挙げましたように、「一読愕然、容を改めて曰ふ、吾ほとんど子を失へりと。これより常に人に語りて曰く、予の西遊、山水は耶馬溪を得、人才は中子玉を得」というふうに、少年を高く評価したものでした。

広瀬淡窓の勧めで20歳の夏に福岡に移り、亀井昭陽の塾に入ります。そしてその翌々文政5年の閏正月、佐伯藩から江戸表に留学するよう直接命令を下され、当時佐伯領内から唯一の給費生として江戸の昌平書生寮に入ります。22歳です。

文政6年はちょうど佐伯藩の参勤交代に当たる年です。愛宕山の近くにあった上屋敷には、現役の毛利高翰公と、文化9年に隠居して以来江戸に滞在中のその父・高誠がおりまして、麻布の下屋敷には高翰の奥方と息子、次代藩主高泰も在府中です。毛利太公高誠が文政12年に54歳で亡くなりますが、文政期は特に参勤交替中は藩邸が大変賑わっています。ちなみに、学者大名で、佐伯文庫を築き上げたとして著名な毛利高標公は、この高誠の父に当たりますが、ちょうど子玉が生まれる享和元年（1801年）に早く亡くなっております。しかし膨大な和漢書籍は、佐伯文庫として、まだ佐伯城山の麓に残っていたのです。

佐伯文庫は子玉が活着している間に江戸へ流出してしまいましたけれど、現在、佐伯市の教育委員会には、膨大な藩政史料が残されています。整理中で未紹介のものばかりですが、これらの史料を丹念に読んでいきますと、中島子玉の家の職歴や、彼の学問に関する事実を数多く知ることができます。特に記録年数が重なる二種類の御用日記からは、子玉の文学修業の日々が詳しくたどれます。この日記の調査を、少なくとも子玉が生存する34年間の分量だけでも精査しなければなりません、ざっと130冊という計算になります。もうしばらく、作業を続ける以外ありません。取りあえず、江戸留学の下命を記した項目から見て参りましょう。

命令は文政5年閏正月の16日、佐伯城中の会所で作られる御番頭日記の中に見えます。益太とありますのは子玉の通称で、幹石衛門は、先から申し上げま

したように、その父のことです。中島家は、代々御徒士を勤め、幹石衛門は文政5年の冬に御徒士小頭助・徒士目付の兼務を命じられたばかりでした。役目は、御儉約掛かりと言いまして、幕府の代官や諸侯からの使者が参りますとその世話役を勤めたり、勝手詰が多い役目です。幕末の分限帳から推しますと、禄高は13石前後でほぼ安定しています。家中の中では小身の部類に入るわけですが、次の資料三に挙がる一条が記された閏正月の16日には、ちょうど会所の勤番に当たる日です。長男の出世を、幹石衛門は手に取るように見透していたに違いない。読んでみます。

◎一中嶋幹石衛門悴益多義於江戸表学問修業被仰付候間当三月御人数一同出府被仰付尤海陸江戸修業中被下方之義者御徒士見習江戸勤番之節惣而被下置候段被仰出候間可申渡由御家老共申合候ニ付其段私共より御徒士頭共を以申渡せ候処御受御礼謁之候 <佐伯氏教育委員会蔵『文政五千年御用日記・正月より六月迄／御番頭』D／III／342>

子玉は、後輩の岡鹿門や重野成斎と同じように青年詩人として江戸で鳴った人でした。中唐の詩人・李賀を好み、李賀の奇怪な作風を模範としたいくつもの作品を作っており、最近、徳田武さんや福島理子さんのご論文にそれらの紹介がなされています。先も申し上げましたが、子玉は多作の割にはその詩文が江戸期に出版されるという形跡がありません。わずかに、咸宜園の総合ダイジェストである『咸宜園百家詩』に20首ほどを記録されるだけであります。従来、この20首と、それから幕末の終わりにできた写本・『米華遺稿』三卷一冊という、全生涯にわたる彼の漢詩を集めた遺稿に頼ることが多かったようです。一方、国会図書館には、子玉の孫中島時軒、一この人は明治時代に佐伯の四教堂で教鞭を執った一人だったらしいのですが一時軒の家にあった自筆稿本10冊もあります。そして近年、別府市にお住まいの中島家ご当主が、その所蔵にかかる子玉関係の資料を残らず佐伯市に寄贈なされたのです。これでようやく子

玉の詩文の全容を眺めることができます。

「中島家寄贈資料」は現在、佐伯市教育委員会の管理下にあります。子玉の稿本や手沢本、書簡や書画も含めて、80点100数10冊というまとまった蔵書です。藩政史料と合わせて、子玉の江戸留学がいつそう具体的にたどれます。資料四にその中の一つ、無題の一冊の稿本から一首だけを抜き取ってみました。一冊は、文政5年の秋から、佐伯に帰る8年の初夏までに書生寮の中で作った習作用の漢詩170首を収めています。「昌平坂学問所」と刷り込んだ罫紙に詠草を一つ一つ書き出して、筆は恐らく古賀侗庵先生のそれでしょう。各篇には句点や訂正、批評などが朱墨でたくさん書き込まれています。たとえば6年の春に、「昌平舎書懷」という七言律詩を詠んでいます。頭欄には、ひときわ大きな丸がついていますので、上手の部類に入るでしょう。韻は、下平十二「侵」というのを使っています。

#### 昌平舎書懷

幾歲天涯獨越吟

語言稍覺變鄉音

慈鳥反哺違吾志

杜宇催歸似母心

花影朦朧<一作/当簾>孤月淡

書聲斷續<一作/穿竹>一燈深

関河不隔相思夢

猶許家山夜々尋

(朱筆・「情文兼至・声涙並下」)

子玉は、昌平饗では佐賀藩出身の、寛政三博士の一人に数えられる古賀精里の三男・古賀侗庵に入門しています。書生寮における侗庵門下の数は当時20人ほどと見え、年齢も身分も区々で、各地方から随時に出たり入ったりした模



様です。文政6年の春から、一門は浅草観音のお詣りをしたり、亀戸で梅を眺めたりと、仲睦まじく交流を重ねています。子玉の目には、江戸文壇の風土は咸宜園や亀井塾で忠告されたその通りに頹廢的に見えたらしく、随筆の中では菊地五山やその一派の俗臭を熱っぽく擲揄しています。

そしてこれも恐らく練習用に作った作文だと思いますが、江戸初期の侠客伝を漢文で記した小説も作っています。『談侠』と題して、侠客26人を二巻で書き上げた割合にまとまった分量ですが、中味の大部分は写本実録・『関東潔競伝』（かんとうけつきでん）というものから採っております。それを適宜脚色しながら漢文に翻案したものです。

書生たちは、諸侯の江戸屋敷によく出入りして、詩会などを盛んに行っています。例えば子玉の詩文集に、林述斎の谷中別荘で詠んだ詩文や、松平冠山に宛てた尺牘、その別荘暖遠楼の二階から眺めた風景を詩に謳ったりしています。松平冠山は、因幡若桜の殿様で学者で蔵書家として有名ですが、毛利高標公の盟友でもありました。文政5年の秋に冠山の娘・露姫が6歳で亡くなって、江戸中の文学者や絵描きにその追悼の作品を冠山が募集した話しはよく知られていますが、古賀侗庵も、書生寮たち一人につき一枚の追悼詩文を作らせ、冠山公に贈っています。6年の8月のことであります。資料五に、参加した人々の名前と出身地だけを載せておきました。この時期、侗庵門の顔ぶれがどのようなものだったかが分かって面白いですが、一番最後の投稿者は西村有蔵と言いまして、肥前諫早の藩士で、もともと佐賀本藩の弘道館に学んだ38歳の学者です。少女の死に寄せた彼の追悼賦は中々の力作です。有蔵は、年下の子玉とは特に親しく、二人はこの一年間、様々な詩文を通して友情を深めていきます。有蔵は、書生寮では舎長より下の齋長というポストに就いていました。齋長とは、先にありましたように経義掛かりと詩文掛かりとに分かれますが、有蔵は詩文の方を担当していたらしい。

しかし、西村有蔵は、露姫の霊前にこの追悼文を捧げてまもなく、自ら命を落とすというはめになります。白昼堂々と、昌平齋の北寮の二階にあった自室

へ、もう一人の学生が乱入して彼を斬殺、居合わせた仲間の二人にも重傷を負わせ、そして捕らえられます。12月3日の正午過ぎ、すなわち今日の題目に言う「昌平饗北寮殺人事件」が起こります。そして、次のように佐伯藩の日記が示すように、子玉は、事件発生後10日も経たないうちに、詩文掛かりという教職に抜擢され、幕府より二人扶持の禄を支給されることとなります。佐伯藩内では、諸手あげての祝賀すべき慶事として受け止められています。(資料七・八)

◎一御徒士頭御闕役ニ付御用人共申聞候中嶋益多義聖堂おゐて齋長素読手伝詩文掛被仰付式人扶持被下之旨古賀小太郎様より御申渡有之候段下川角内書付を以相達候旨申聞候ニ付達御聴候旨申越候 <文政六年十二月十五日・江戸詰家老関谷単人送付御用状。佐伯市教育委員会蔵『文政七申歳正月ヨリ六月迄中村志津摩益田金兵衛・日記』(家老御用日記)に記入>

◎一中嶋益多義聖堂ニおゐて齋長素読手伝詩文懸り被仰付御扶持二人分被下置候同人義聖堂ニ罷出無間も多人数之内より右躰被仰付候義平日心懸宜敷く出精故之義ニ候依之親幹右衛門へ御言葉之御褒美被仰出候猶又益多義出精いたし候様申遣候様可申渡義御番頭共より御徒士頭共を以申渡せ候処難有仕合奉存候両殿様若殿様へ御礼謁之候段御番頭御徒士頭共申聞候 <文政七年一月二十六日項。佐伯市教育委員会蔵『文政七申歳正月ヨリ六月迄中村志津摩益田金兵衛・日記』(家老御用日記)>

ここで、子玉のあまりにも急な出世に先立つ、12月3日の学内騒動の経緯を紹介しておきましょう。資料の六を御覧下さい。

◎文政六年十二月三日昼九ツ時、於学問所諸生寮ニ変事。

松平肥後守家来

刃傷ニ及び候当人		狩野軍平衛
頭三分二程切込	松平肥後守家来	
即死		西村勇藏
肩先五寸余切込	同 家来	
深サ三寸		吉村東兵衛
	津軽越中守家来	
横腹四寸程切込		松井啓藏
狩野軍兵衛ヲ	同家来	
捕而縛る		黒滝藤太

右は学問所北寮二階ニ而之騒動也。

(『藤岡屋日記』第一卷)

会津藩士狩野軍兵衛は、竹本宗次郎というもう一人の書生と何がしかの原因で争いとなり、恥辱を受けたとして、怒りをつのらせます。ある日、寮の齋長—これは西村勇藏ではないかと思われませんが—齋長の指示によって寮生二人が軍兵衛の見回り品を片付けようとしたところ、偶然、軍兵衛が宗次郎に宛てた宣告文が見つかり、二人はそれを読んてしまいます。当局へこのことを通告すべきところ、二人は詮索を恐れて、その場で手紙を燃やし、問題を隠ぺいしようとした。しかし、軍兵衛の怒りはつの一で、12月3日の朝、寮全体の責任者、舎長である黒滝藤太の部屋を訪ね、抗議をします。その場口論となり、軍兵衛が刀を抜く一幕もあったが、黒滝の懸命の説得に折れて一旦は去っていったらしい(資料十の説明)

しかし同日の昼過ぎ、軍兵衛は再びやってきます。今度は舎長ではなく、齋長の西村有(勇)藏の部屋をめがけて、弁解の一言も言わず有藏を斬殺、たまたま側にいた松井啓藏を傷付け、そして吉村東兵衛の部屋に乱入して、東兵衛にも深手を負わせます。その場へ黒滝藤太が駆けつけてきて、後ろから軍兵衛を張り倒して、逮捕します。『藤岡屋日記』の記録には見えませんが、こ

の時、子玉は外から騒動の声を聞きつけ帰って来まして、果敢にも軍兵衛の取り押さえに加勢した上、自ら戒めの縄を犯人にかけたと言われる（資料二「子玉伝」等）。

一件に対する幕府の評定は、翌文政7年8月23日に下されます。今日の要旨に記しましたように、書生にとってかなり厳しいものでした。軍兵衛は、資料十の最後にありますように、吟味中、死んでおり、沙汰に及びません。怪我をした吉村も松井も、無罪となったが、責任者で最後に犯人と交渉した黒滝藤太は、叱りを賜るべきところ、捕縛の手柄を買われて咎を免れたのです。

子玉は、資料九・十一の往復書簡から分かりますように、事件のことと、それが直接の原因となった自分の昇進をすばやく地元の師や先輩に報じています。広瀬淡窓・亀井昭陽・草場佩川は、いずれも東都のこの珍事に注目していますが、子玉の勇気と出世を祝うと同時に、江戸昌平饗の行方を危ぶんでもいます。資料十一は、8月の判決後はじめて、江戸から昭陽に送った書簡です。

#### 奉呈亀元鳳先生書

（前略）寮中殺伐之驚、真宇宙間一大怪事、如前所略陳、本月二十三日、幕府始賜申理、軍兵衛病死于獄中、他皆無責、自事起凡九閱月、而始獄成。来書曰、至賚在外聞變、不及反兵、提箒於地走入、惣覺足下電目閃然於灯火上也、賚読至此、自尋思曰、当其時、吾何以処之、遂不得其説也、嗚乎事真有似勇而実怯、似怯而実勇者、若在其時、使賚少有所顧慮、必不赤手向白刃下、唯一時惶急、不暇畏死、故頗似勇耳云々

<文政七年八月子玉撰。国会図『海棠窩文集』（自筆）所収>

先便で昭陽先生から武勇を褒められました。が、実際のところとっさの出来事であり、正気にもどってみると、空恐ろしい気分だったと、子玉は謙遜して見せます。しかし江戸において子玉は、豪語したかどうか定かでないが、この事件に関しては心中少々得意気であつたらしい。7年9月、黒滝藤太は津軽侯

から五十石を賜り、結局勇退という形で聖堂から引き上げ国元へ帰ってゆきま  
す。子玉がその送別に認めた「送黒滝元帥序」（資料十二）から、いきさつを  
たどることができます。

渦中の教官、古賀侘庵自身がこの不祥事をどのように考えたかを、最後に  
見てみましょう。資料十四を御覧下さい。評定沙汰という不名誉に加えて、陸  
続として増え続けていた入学者の数がめっきり減って、このままでは休業に追  
い込まれるのではないかとすら危惧しております。

曩日書生寮之變、苗ム者、抜白害西方生、又傷吉井二生、卒為玄泉  
子所執、下獄瘦死、株連者數輩、自是世人視書生寮、殆如湯火之獄、  
豺虎之窟宅、父則詔乃子、兄則諭其弟、妻則挽留良人、謂書生寮難可  
迹、於是乎、向之旧欲入学者、亦皆催沮、廢然有回轅之心、寮中士子、  
亦間有心懷不安者、近歲書生負笈來遊者、陸續弗絕、變故之後、頗覺  
寥々可歎、夫客冬之禍酷矣、宝水建学以降、所絶無也、然此特非常之  
變乎、有墮馬而折骨者、有畜狗口而見嚙殺者、猶然慄云々（文政七年  
古賀侘庵撰「道聽漫記」（国会図書館「侘庵全集三集」卷四所収））。

中島子玉は、名誉ある昌平饗書生寮詩文掛かりを文政8年4月までに勤め上  
げ、その後、やはり佐伯藩命により帰省、藩校の教授に収まります。文政11年、  
28歳の時、藩の特別の配慮により中小姓に取り立てられ、実家とは別に一家を  
興すことを許されます。亡くなる天保5年までに、一度は上方にも遊び、変わ  
らぬ高評を得ながら多くの詩文をものしました。子玉の文芸そのものについて、  
機会を改めて、思うところを述べたいと思いますが、今日は取りあえず、この  
人物の軌跡を通して、文政期の江戸昌平饗における一側面を垣間みようとした  
次第です。最後に、子玉が江戸を去って佐伯に帰った直後の8年9月付の、後  
輩からの手紙を一通紹介して発表を終わらせて頂きたいと思います。後に岡鹿  
門ら幕末の志士たちを直接指導した、幕府儒官の塩谷宕陰が17歳に認めたもの

です。入学2年目の時です。子玉の帰省後、寮中には「更に奇人快士無き」を愁える文面であります。

一翰啓上仕候追日冷気相催候得者愈御清栄御勤奉恭賀候先頃者長途之所海陸無御滞御帰郷被成久々ニ而御挙族様御逢被成嗚々御満悦之程遠察仕候江都正当重陽之節遙懷兄之三徑菊花之色不堪恋々御詰合中者厚ク御世話ニ相成御札難申尽千万奉拝謝候兄之退寮後寮中更無奇人快士則懷兄之情益深亦兄之所謂缺典者耶一笑御帰鞍御悦早速可申上候所彼は延引失礼仕候御華章被下則□□（註・破）相違縷々御懇情奉謝候愚父へも玉章被下此度者小子より御札厚く申上候様申聞候猶後鴻委曲可申上奉残候若江戸表ニ御用者御座候者無御遠慮可仰下候昭陽先文稿二本及書簡六通慥転致仕候寮生皆々宜敷伝声申聞候追テ手簡可進候恐惶謹言

九月十一日

塩谷甲蔵

中島益多様

長崎一助曰被示松崎子文稿来歴斧削猶侍後鴻

<文政八年塩谷宕陰書簡。佐伯市教育委員会蔵>

## 討議要旨

武井協三氏より「津軽越中守については、弘前藩の膨大な藩政記録が弘前市立図書館に在るので、参考にされるとよい」との助言があり、また佐伯市の藩政資料について、その年代について質問された。発表者は「延宝からの記録があり、享保以降記述が詳細になる」と回答された。平岡敏夫氏から「時間の制限で言いのこされていることがあるのではないか」との示唆があり、発表者は「事件後間もなく、亀井昭陽や広瀬淡窓など何人かの儒者に報告の書簡が行っており、これが面白い。また、彼の人物評にも優れたものがあり、これらにもふれたかった。」と答えられた。藤原鎮男氏は、東大にはこれら儒学者の系譜をひく先生方がおられたことを述べられた。